

# 仙台

# 文学館

# ニュース

Sendai  
Literature  
Museum  
News

第四十七号

エッセイ

## あかまつの道を抜けて

第9回 —— 「蟬の声」

佐伯一麦

七月に入ると、夜明け前や夕暮れに、ためらいがちに小鈴を振るように鳴くヒグラシの声が聞こえてくるのを待ち受ける心地となる。

大年寺山にある寓居では、今年は七月四日の夕方に聞いた。毎年、その日を手帖に書き留めるようにしており、だいたいこのあたりとなる。

詩人の伊東静雄に「七月二日・初蟬」と題された詩がある。(あけがた／眠からさめて／初蟬をきく／はじめ／地虫かときいてゐたが／やはり蟬であつた)

伊東静雄は大阪に住んでいたから、初蟬は東北よりも少し早かつたのだろう。地虫のように鳴く蟬とは、やはりこの時季に「ジー」と鳴く、ニイニイ蟬だったと想われる。

ニイニイ蟬といえば、芭蕉が山寺で詠んだ(閑さや岩にしみ入る蟬の声)の句の蟬について、油蟬だと主張する斎藤茂吉とニイニイ蟬だとする小宮豊隆との間でかつて蟬論争があつた。芭蕉が山寺を訪れた元禄二年の旧暦五月二十七日は、新暦を調べてみると七月十三日となり、油蟬にはやや早いように思える。論争もやはり、ニイニイ蟬

説に軍配が挙がつた。

虫の鳴き声を、日本人は言語をつかさどる左脳で聞き、心地好いものと感じるのに対して、外国人は右脳で聞くので、雑音のように認識される、という説がある。

もつとも、例外もあるようで、米国の客人が、我が家で寝酒をかたむけつつ、深夜にヒグラシの声を聞きながら、私が「カナカナカナカナ、と聞こえる」と言うと、「自分には Come Come Come と聞こえる」と言つたことがある。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、蟬に関する論文で、(ヒグラシの叫に聞して最も驚く可き事實は、その一匹一匹の音色に特色を帯びしめる個性である)(或る音色は銀の如く響き、或るものは銅の如く震ひひびく)と記している。それに倣(な)つて、庭で鳴き出したヒグラシの声に耳を傾けてみると、まさに銀や銅の響きであり、さらにそれぞれの響きに、軽重が感じ取れるようだ。

(ささきかずみ 作家・仙台文学館館長)

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

### CONTENTS

- エッセイ  
「あかまつの道を抜けて」佐伯一麦 ……1
- シリーズ  
「私の一冊」木村紅美 ……2
- 予告  
2024年度 秋の特別展  
「文豪、仙台二立チ寄ル。」……4
- 文学館日誌 ……8

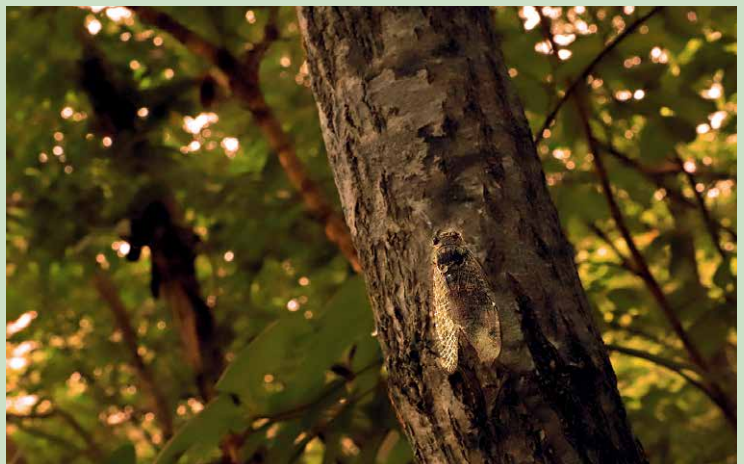


写真:佐々木隆二



版画：明才

シリーズ「私の一冊」第41回

## 木村紅美

友部正人

### 『耳をすます旅人』

友部正人、というミュージシャンの名前を初めて知ったのは、仙台にある高校へ通っていた十六歳くらいの頃だ。当時、夢中になっていたバンド「たま」のメンバー達が友部さんを尊敬していたのがきっかけだった。高校を卒業すると同時に、私の家族は岩手県の盛岡へ移った。私は東京の大学へ進み、こんどは、春休みのたびに一人旅に出るようになった沖縄県で、友部さんの名前をよく聞くようになる。

いろんな離島の民宿で泊まり合せた人に、実家は盛岡、と話したら、『クラムボン』、という友部さんの好きな喫茶店がありますね」と言われた。沖縄で教わったクラムボンは、実家から徒歩圏内であって、私は帰

目指した自分の心境が、ずっと、歌のなかに閉じこめられていて解き放たれたように、よみがえってきたのだった。あの旅がなければ、自分は

省のたびに通う習慣がついた。『耳をすます旅人』を薦めてくれたのは、大卒卒業後にバイトを始めた神保町の書店で仲良くなった京都出身の面白い女の人で、クラムボンが登場する、と聞いてすぐに買った。他にも、日本の北から南の端まで、友部さんが全国をこまか

く歌い歩いて親しくなった人たちや、思い入れの深い場所について書かれたエッセイ集である。どのページをめくっても、一瞬で、そこへ自分も旅に出かける気持になる。この時期に、ようやく、友部さんの音楽も聴き始めて好きになった。

それから、本書は、気がつけば二十五年ほど、数回の引越しを経て、つねに私の枕もとの本棚にある。書店バイトを辞めて日本橋の商社で経理事務の仕事に就き、社風にまったく馴染めなくて苦しんだ時期、毎晩読み返した。精神安定剤の役割を果たしていたと思う。北海道には『とほ』という一人旅向けの宿のガイドブックがあることを知り、会社を辞める前年の夏休み、『とほ』だけを

デビュー作を書けなかった。

翌日、クラムボンへ行つて珈琲を飲んでみると、なんと、友部さんとユミさんの夫妻といっしょに、火星

頼りに道東を回った経験は、のちに、私のデビュー作となる小説『風化する女』の後半に活きた。

小説家になってからも、しょっちゅう手に取った。ある時、どうしてもここへ行かないや、という強い衝動に駆られ、「朝ごはんのおいしい食べ方」の章に出てくる静岡県の下田のホテル、「アーネスト・ハウス」に泊りに行ったことも大きかった。海辺の小さなホテルを舞台に揺れ動く人間模様を描きたくなり、『春待ち海岸カルナヴァル』の設定を思いついた。いまはもうない、『旅』という雑誌で連載が始まるまえ、ふたりの担当編集者と、挿絵を手がけてくださったイラストレーター、網中いづるさんと泊りに行ったのも、忘れられない楽しい思い出。以来、網中さんとの交流は続いていて、盛岡の家に泊りに来たことがある。逆に、大分県の別府まで私が網中さんを訪ねたこともあった。一冊の本が、なんと自分の世界を広げて深めてくれたものと驚いてしまう。

定禅寺通りの古本カフェ「火星の庭」を知ったのは、友部さんのブログがきっかけだ。東京に住んでいた頃から、たまに、高校時代の友人

の庭の店主である前野久美子さんが入ってくるではないか。前野さんとお店で会話をしたことはなかったのだが、向うから気づいて夫妻を紹介してくれた。

二十五年間、一方的に本を読み歌を聴き、吉祥寺の中道商店街にあった頃のタワーレコードでライヴ盤にサインを貰った友部さんと、初めて、間近で向いあつてお話しした。最も心臓が跳びあがりそうになったのは、ユミさんが、偶然『あなたに安全な人』を読んでいて感想まで頂いたことだ。『耳をすます旅人』は一章ごとに添えられたユミさんの写真も素晴



友部正人  
写真：小野由美子  
『耳をすます旅人』  
(1999年 水声社)

たちとの宴会に参加するため仙台へ行くことがあると、寄っていた。二〇二〇年の秋に私は都内のアパートを引き払い、盛岡の実家へ移り、仙台に遊びに行く機会が増えた。高速バスターミナルが近いから、いまでは、盛岡へ戻るまえに本を買いに寄ることが多い。お茶したり、友人との待ち合わせ場所に指定する時もある。

昨年一月、盛岡のホールで友部さんのライヴを見た。東京でも何度かライヴは行っていただけど久しぶりだった。夕暮れの鉦路湿原が思い浮ぶ「水門」を聴き涙目になった。会社が終わったあと、上野発の夜行列車に飛び乗って北海道の東の果てを

らしい本で、私は、夢のような遭遇に足が浮いて暗くなった雪道を帰宅すると、さっそく、本書を引っぱりだした。

今年の三月にはクラムボンで友部さんの歌をマイクなしで聴いた。限定二十名のライヴなんて、東京ではありえないかもしれない。東北地方に暮し始めてからのほうが、友部さんの存在が身近に感じられるようになったのは、とても嬉しい。そして、今またこの本も、歌を聴き読み返すことが増えている。ずっと、私の枕もとにあり見守ってくれる。まるで一生の友だちみたいだ。



木村紅美  
きむらくみ

小説家。1976年兵庫県生まれ。小学校は福岡県、千葉県、宮城県と通った。仙台南山高等学校、明治学院大学文学部芸術学科卒業。2006年に『風化する女』で第102回文学界新人賞受賞。2021年に『あなたに安全な人』で第32回 Bunkamura ドゥマゴ文学賞受賞。他の著作に『月食の日』『まっぶたつの先生』『雪子さんの足音』『夜のだれかの岸辺』など。

仙台文学館 二〇二四年度秋の特別展

# 「文豪、仙台二立ち寄ル。」

一八八七（明治20）年に仙台駅が開

業し、上野から塩釜まで鉄道が開通し

て多くの人が行き交う場所となった仙

台には、文壇で活躍した文学者たちも

学業や仕事・旅などで訪れました。

本展示では、島崎藤村・岩野泡鳴・

正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐・

宮沢賢治・太宰治の7名にスポットを

当て、仙台とのかかわりを集めます。

予告編となる本記事では、なぜ彼ら

が仙台へ来ることになったのかを紹

介します。

仙台の学校へ

教師として赴任。

島崎藤村

一八七二〜一九四三



現在の岐阜県中津川市生まれ。詩人・小説家。代表作に詩集『若菜集』、小説『破戒』『夜明け前』などがある。

一八九六（明治29）年に東北学院の教師として赴任し、約10カ月ほどを仙台で過ごした。その頃に作った詩はのちに第一詩集『若菜集』としてまとめられた。

## Q. どうして仙台へ?

### A. 仕事で

いろいろあって、

仙台で学生に

なることに。

岩野泡鳴

一八七三〜一九二〇



現在の兵庫県洲本市生まれ。小説家。代表作に小説『耽溺』、評論『神秘的半獣主義』などがある。

東京の学校を卒業した後、一八九一（明治24）年、教師として働くために仙台神学校（現在の東北学院）に来たが、試験の結果、学生として入学することになった。

通っていた学部が廃止され、

仙台へ転学。

高浜虚子

一八七四〜一九五九



現在の愛媛県松山市生まれ。俳人・小説家。河東碧梧桐とともに、正岡子規の下で俳句を学んだ。雑誌『ホト、ギス』を子規から引き継ぎ、夏目漱石の小説「吾輩は猫である」を連載した。

一八九四（明治27）年に公布された高等学校令により、京都の第三高等中学校の文科が廃止され、虚子と碧梧桐を含む在籍学生たちは各地の学校へ転学せざるを得なくなった。二人は仙台の旧制二高に転学後、ごく短期間で退学したが、在仙の間も句作に励み、旧制二高の学内雑誌にも作品を発表している。

河東碧梧桐

一八七三〜一九三七



現在の愛媛県松山市生まれ。俳人・随筆家。高浜虚子とともに正岡子規に俳句を学んだのち、五・七・五の形式にとられない新傾向俳句の普及に努めた。

### A. 学業で

特別展「文豪、仙台ニ立ち寄ル。」関連イベント | 全て会場は  
仙台文学館 2 階講習室

1. 晩翠忌記念イベント関連企画  
SPLレコードで聴く「宮沢賢治と音楽」  
刊行100周年『春と修羅』～かげとひかりのひとくさりづつ～

日時：10月19日（土）13：30～15：30  
出演：案内人・ささきたかお氏（宮沢賢治と音楽 研究家）  
音楽・井上英司氏（キーボード）、松村和昭氏（クラリネット）

2. 対談「岩野泡鳴を語る」

日時：11月10日（日）13：30～15：00  
講師：池上冬樹氏（文芸評論家）、佐伯一麦（作家、仙台文学館館長）

3. 講演「太宰治と仙台」

日時：12月1日（日）13：30～15：00  
講師：須永誠氏（フリーライター）

各イベント申込の受付開始日は、チラシ・当館ホームページ・Xアカウント・仙台市政だよりなどで順次告知します。


ゲーム「文豪とアルケミスト」どの  
タイアップを行います。

本展「文豪、仙台ニ立ち寄ル。」は、文学を題材にした人気ゲーム「文豪とアルケミスト」（DMM GAMES）とタイアップし、ゲームに登場する島崎藤村、岩野泡鳴、正岡子規、高浜虚子、河東碧梧桐、宮沢賢治、太宰治の等身大パネルの設置、展示観覧特典しおりの配布、オリジナルグッズの販売を実施します。

※特典やグッズの数量には限りがあります。配布終了・完売の場合はご容赦ください。  
※当館受付のみでの販売です。お支払方法は現金のみになります。


特別展  
「文豪、仙台ニ立ち寄ル。」

会 期 2024年10月5日（土）～12月15日（日）  
休館日：毎週月曜日（10月14日、11月4日は開館）、11月5日、第4木曜日  
開館時間 9時～17時  
（展示室への入室は16時30分まで）  
観覧料 一般810円、高校生460円、  
小・中学生230円（各種割引あり）



「文豪とアルケミスト」とは？

DMM GAMESにて配信中の文豪転生シミュレーションゲーム。文学書のページを黒く染めていく「本の中の世界を破壊する侵略者」に対抗するため、錬金術師は文学の力を知る文豪を転生させる。彼らは文学書を守るため、「侵略者」たちを打ち破っていく。実在の文豪をキャラクターとして登場させるのが特徴。2016年11月にPCブラウザ版、翌17年6月にはアプリ版を配信し登録者数は現在160万人を超えている。



© 2016 EXNOA LLC

A. 取材・旅行で

一八九三（明治26）年、江戸時代の俳人・松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』の足跡を巡るため、東北旅行を決行。道中、松島や多賀城の他、仙台市内の愛宕神社や瑞鳳殿なども訪れ、作並温泉に宿泊した。その旅行記は、「はて知らずの記」として新聞に掲載された。



正岡子規

一八六七～一九〇二

『おくのほそ道』の  
旅路をたどる

一九四四（昭和19）年、中国の文豪・魯迅を題材にした小説『惜別』の執筆に向け、魯迅が留学生として滞在していた仙台を訪れ、地元新聞社である河北新報社の協力を得て取材を進めた。



太宰治

一九〇九～一九四八

小説執筆のため、  
主人公が若き日を  
過ごした仙台へ。

現在の愛媛県松山市生まれ。俳人・歌人。『獺祭書屋俳話』『歌よみに与ふる書』を著し、俳句・短歌の革新運動を推進した。

現在の青森県五所川原市生まれ。小説家。代表作に『人間失格』『走れメロス』などがある。

A. 複合型



宮沢賢治

一八九六～一九三三

趣味、仕事、  
その他  
もろもろ

現在の岩手県花巻市生まれ。詩人・童話作家。代表作に詩集『春と修羅』、小説『銀河鉄道の夜』などがある。

仙台には一九二二（明治45）年に中学校の修学旅行で初めて訪れ、その後も仙台で開かれた東北産業博覧会の見学、東北砕石工場の社員としての出張などで何度も訪れた。童話「ポラールの広場」では、仙台をモデルにした「センダード」という街を登場させている。

特別展「文豪、仙台ニ立ち寄ル。」では、この7名の作家と仙台どのかかわりや、交流のあった地元の文学者、ゆかりの場所などを紹介します。

2024年3月～2024年7月



①文学館の建設工事の様子(1997年8月)。



②昨年度に引き続き2回目の特別講座。日本・世界の近現代文学作品のなかから佐伯館長が厳選した一作を、参加者とともに読み進めました。



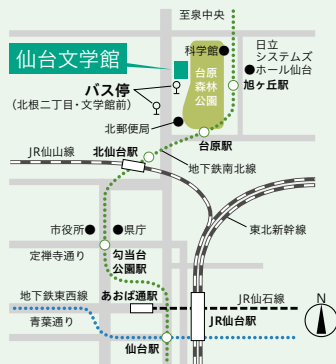
③おふたりの熱演により、石川善助の詩の世界とその魅力をお伝えすることができました。



④贈賞式後には各部門の選者(短歌:本田一弘氏、梶原さい子氏、俳句:堀田季何氏、高野ムツオ氏、川柳:斎藤泰子氏、霰石隆子氏)による講評がありました。

- 6月 4日 2階エントランスにて、仙台市文化財課主催の「第79回文化財展 最新の調査報告2024」サテライト展示を開催(7月7日まで)。
- 15日 特別展関連イベント 朗読と音楽の調べ「石川善助・その生と言葉の軌跡」を開催。出演は俳優の芝原弘氏と菊池佳南氏。〈写真③〉
- 22日 第27回「ことばの祭典—短歌・俳句・川柳へのいざない—」(短詩型3部門の合同吟行会)を開催。「鼻」もしくは「拾う」の詠題で、短歌113首、俳句123句、川柳104句から各賞が選ばれた。〈写真④〉
- 29日 特別展関連イベント 講座「石川善助と宮沢賢治をつなぐもの」を開催。講師は大阪国際児童文学振興財団理事長・宮川健郎氏。
- 7月 3日 外看板と館内のバナーを「こども文学館えほんのひろば 長野ヒデ子 絵本と紙芝居」に掛け替え。
- 20日 「こども文学館えほんのひろば 長野ヒデ子 絵本と紙芝居」オープン(9月8日まで)。初日に合わせ、記念イベント「長野ヒデ子&くだうれいんトーク『絵本とわたし』」を開催。

- 3月 2日 日立システムズホール仙台 シアターホールにて、ライブ文学館『ブラザー軒』の詩人 菅原克己の詩を歌う』を開催。第1部は佐久間順平氏、榊原光裕氏、白鳥英一氏による演奏と朗読。第2部は佐久間氏、アーサー・ピナード氏、日高德迪氏によるトーク。
- 17日 企画展「仙台文学館の語り部たち～資料でたどる文学の記憶」会期終了。
- 19日 外看板と館内のバナーを25周年記念特別展「詩人・石川善助をたずねて～北方への道のり」に掛け替え。
- 28日 開館25年記念日(当館は1999年3月28日に開館)。(写真①)
- 4月 12日 3月28日に逝去した絵本画家・さとうわきこさんの追悼コーナーを、2階情報コーナーに設置。当館では2004年、「こども文学館えほんのひろば」にてさとうさんの原画展を開催した。
- 20日 当館講習室を会場に、「第7回仙台短編文学賞」の授賞式が開催された。
- 27日 25周年記念特別展「詩人・石川善助をたずねて～北方への道のり」オープン(6月30日まで)。
- 29日 特別展関連イベント 講座「仙台の文化活動と石川善助」を開催。講師は文教大学教授・加藤理氏。
- 5月 2日 4月28日に逝去した画家・星野富弘さんの追悼コーナーを、2階情報コーナーに設置。当館では2013年、企画展「星野富弘 花の詩画展」を開催した。
- 中旬 敷地内のツツジが満開に。
- 18日 佐伯一麦館長による特別講座「佐伯一麦と読むキャサリン・マンスフィールド『園遊会』」を開催。(写真②)
- 25日 特別展関連イベント 講座「石川善助・その詩の成立—「創作ノート」から—」を開催。講師は東北大学名誉教授・佐藤伸宏氏。
- 6月 1日 特別展関連トークイベント「詩人・石川善助との出会いと、100年前からのメッセージ」を開催。出演は石川善助研究者・木村健司氏。



交通のご案内

■バス利用の場合

(宮城交通バス)

- 仙台駅西口バスプール2～4、6番乗り場 仙台北・泉地区方面行 (北山トンネル経由を除く)

(市営バス)

- 仙台駅西口バスプール6番乗り場 八乙女駅行

※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

- 地下鉄南北線「台原駅」下車、南1番出口より徒歩約25分(台原森林公園内あかまつの道経由) ※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台(無料)

台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひざしの杜

お食事、デザート、各種飲み物などをご用意しています。お得なランチメニューもあります♪

〔営業時間〕  
10:00～16:00(ラストオーダー15:50)  
※ランチは10:00～14:00  
TEL 022-219-1341

